
とある科学とネギまの世界

2Pカラー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学とネギまの世界

【Nコード】

N2000T

【作者名】

2Pカラー

【あらすじ】

結標淡希は残骸事件の折りに一方通行に撃破され、気が付けば見知らぬ世界の赤ん坊になっていた。そんな転生物語。

(前書き)

キャラ崩壊がひどいです

そろもう「なんでこんなになるまで放っておいたんだ」ってくらいひどいです

原作準拠ではなく、某巨大掲示板で氾濫しているSS準拠になっております

その辺りは平にご容赦を

独自のカリキュラムによって科学的に超能力を発現させる教育機関。学園都市^{レベル5}。

七人の超能力者^{レベル5}を頂点に、二百三十万人の学生が序列をつけられるその都市において、私の与えられたのは大能力者の称号^{レベル4}だった。だけど、私には分からなかった。何故、こんな力が私にあるのか。かつて己の能力で自分自身を傷つけて以来、この身に宿った能力の意味を、この能力が現れたのが私である意味を、ただただ自問し続けてきた。

答えの出ない問い。出るはずもない問い。それに頭を悩ませ続け、やがて諦めてしまおうかとの諦念に至るのに時間はかからなかった。そんな時に耳に挟んだ情報。かつて衛星軌道上にあり、なんらかの要因で破損した樹形図^{ツリーダイアグラム}の設計者を学園都市の上層部が回収したとの噂。

ツリーダイアグラム
樹形図の設計者。世界一の演算力を持つスーパーコンピューターの、さらに数世代先を行くとも言われる超高度並列演算処理器。

それならば私の問いに対する答えが得られるかもしれないと思い、そして私は学園都市と敵対した。

レムナント
残骸を奪い、邪魔する者を排除し、走って、走って、走って、そして、悪魔に出会った。

病的なほどに白い肌。血に染まったかのように朱い瞳。モノトーンで統一された衣服は、目の前の人間が絵画に描かれた存在であるかのように錯覚させ、そしてその白い髪は、絵本の中の悪魔を思わせた。

悪魔の笑い声に息が止まる。

悪魔が足を踏み出すごとに汗が流れる。

悪魔が笑いながら腕を振りかぶり、

「ここから先は——」

悪魔の笑みが私の血を凍らせた。

「一方通行だ!!」

そして、悪魔の拳が触れた瞬間、私の命が止まったのだった。

——とある魔法と座標移動——
ハイポイント

あの日、学園都市最強の超能力者、一方通行アクセラレータによる男女平等顔面パンチをお見舞いされた私は、その瞬間命を落とした。

いや、正確には命を落としたのだろうと推測している。

なぜならあれから三年経った今でも、現状が現実であると断定できなかつたりするのだから。

だってそうでしょう？ 科学全盛の時代にあって、こんな状況を現実だと受け止めるのは難しいものがあるもの。

中二病っぽい服装のバカに殴られました↓気を失いました↓目を覚ましたら体が縮ん出ました↓しかも名前が変わっていました↓ダメ押しにこの世には魔法があるそうです。

これがうわさに聞く輪廻転生と言うやつなのかしら？ その考えに行きつくことは、かつて二百三十万人の学生の内、もつとも八人ルミ目に近いと呼ばれた私にとっては容易なこと。だけれども、その考えを受け入れるのは世界最高の科学で構築されたあの都市で生きてきた私にとっては難しい事だった。

今でもたまに思う。コレは壮大な夢なんじゃないかって。今も結

標淡希の体は病院のベッドの上なんじゃとか、もしくは学園都市の上層部に脳だけ回収されて能力を吐き出すだけの装置にさせられたもではとか。

もつともそんなネガティブな思考の迷宮に飛び込むのは本当に『たまに』のこと。

だってそうでしょう？ 答えの出ない問いにはもう飽き飽きなんだから。

そして、

『プラクティギナル アールデスカット』

そして、

「えいつ」

そして、

「いまなんかでたかもー」

そして、こんな天国を見せられて余計なことを考えてる余裕なんかないじゃない！！ 常識的に考えて！！

「今日も可愛いわぁ。白人少年とか、たまらないわぁ」

だから私は受け入れるの。

この世界は夢なのかもしれない。転生なんて受け止められないかもしれない。

でも、結標淡希が目の前のシヨ^{わたし}t……少年、ネギ・スプリングフィールドの双子の姉であるという現実は、絶対に受け入れるわ。

「自分だけの現実って、こういうことだったのね!!」
パーソナルリアリティ

私の声にネギきゅんが不思議そうに首を傾げているけど、その表情もたまらないわ!!!

第一巻 あわきん、麻帆良に降り立つ

「ふむ。ネギ君には女子中等部の担任を「却下よ」

まったく。いったい何を考えてるのかしら。この後頭部は。

現在私と最愛の弟であるネギきゅんは麻帆良の学園長と名乗ってる妖怪と対峙している。というのもネギきゅんの修行先がこの麻帆良学園で教師をすることだったからだ。え？ 私の修行？ MMで案内人とか卒業証書に浮かんだ瞬間破り捨てたわよ。

「いや、そう言われても既に決定しておることじゃし」「だったら変更しなさい」

なおも食い下がる後頭部にそう言って切り捨てる。冗談じゃないってのよ。こんなにラブリでキュートなネギきゅんを女子中の教師なんかにして、いったいどうするつもりなのかしら。シヨタコンが群がってきちゃうじゃない。私は違うわよ、ただ無垢な少年が好きってだけだもの。

「ネギきゅん……ネギを教師にするというのなら男子校の教師にしないさい。出来れば小学校で。私は保健の先生ポジションでお願いね」

「じゃ、じゃが、他の学校の教師は既に一杯でいう「なら首にでも何でもすればいいじゃない」」

その程度の判断も出来ないなんて。こんな連中にネギきゅんを任せないで良かったわ。私が付いて来なかったらどうなってたことやら。

「あんまり無理言ったらダメだよ、お姉ちゃ」「だいじょうぶよ！ネギきゅんはなーんにも心配しないでいいんだからね！お姉ちゃんがついてるんだから！」

殺伐になりかけた雰囲気にとおびえ気味のネギきゅんを抱きしめてそう言う。

あー、やっぱりたまらないわあ。九歳くらいが至高よね。今なら私もあのセリフに共感できるわ。

ええ。『中学生はジジイ（ババア）なのよ（なんだよ）！』ってね。

第一戦 Winner Awakin

第二巻 あわきん、犬っ子に出会う

ハメられた。そんな言葉が私の脳裏に浮かぶ。

というのもネギきゅんと私の仕事先として用意された麻帆良男子中等部（結局初等部はダメだったわ。忌々しい。そりゃ十四歳くらいならストライクゾーンだけど）の修学旅行先が京都だったからだ。

どこからか京都に私たちの父親の別荘があるとか聞きつけてきたネギきゅんはとってもテンションあがってたけど、私は単純に喜んだりできなかった。

まず最初に気に入らなかったのは、ネギきゅんのクラスの日程と麻帆良女子中のお騒がせクラス3-Aの日程が被っていたことだ。あのクラスにはネギきゅんの極上スメルを嗅ぎ付けてきた雌猫どもが溢れているというのにッ！

そして次に気に入らなかったこと。それはあの妖怪がネギきゅんを関西のナントカいう組織に向けた特使に仕立て上げたことだ。喧嘩ならネギきゅんを巻き込まないでやってもらいたいものよね。それで全滅してしまえばいいのよ。麻帆良の魔法生徒には有能そうなシヨtt……少年はいなかったし、みんな死んでしまえばいいんだわ。そして第三の気に入らないこと。よりにもよって特使の任務を与えられたネギきゅんに、ぬらりひよんの孫（♀）の護衛まで押しつけたってことよ。さっきから私のネギきゅんをいやらしい目で見つめてくる近衛に神楽坂。あとなんでか睨んでくる桜咲。この雌猫どもめッ！ 今ならお姉ちゃん、レベル5になればそうな気もするわ。ウフフフフフフフフフ。

と、私が溢れんばかりのネギきゅんへの愛でピンクのオーラを立ち上らせていると、頭上から巨大なクモが降ってきた。

「なっ！？ 刺客か！？ お嬢様、私の後ろ」ムーブポイント「はい、座標移動」

「え？ せっっちゃ」ムーブポイント「あなたも座標移動」

「ちょ」ムーブポイント「ついでに座標移動」

小うるさいネコ共を座標移動で飛ばす。行先は関西ナントカ協会。三人目のツインテールを飛ばす時だけレジストされたような違和感

があつたけど……まあ死にはしないでしょ。死んでも少年じゃないならどうでもいいし。

「な!？ お前、なにしよったんや!？」

「護衛対象を傷つけないように送り届けただけよ。こんなことでネギの輝かしい経歴に傷をつけたくなかった……ん？」

巨大なクモから飛び降りた影を見て何やら私のレーダーが反応する。え？ なにあの子。素晴らしい素材じゃない!! ネギきゅんみたいな従順系少年もいいけど、あの子みたいなワイルド系もいいわ!! その上必死に背伸びしてる感じ。抱きしめてなでなでしたら、きっとパシッて手を振り払って顔を赤くするんだわ。それで耳まで真っ赤なくせに「子ども扱いすんな!」とか怒鳴って見たりして、でも私が「ごめんね」って肩を落としたら必死でフォローしてくれたりなんかして!! あ、ヤバいわ、鼻血なんて淑女としてあるまじき――

「まあええわ! 俺も女なんか殴りとうないしな! 俺が興味あったのは西洋魔術師、ネギ・スプリングフィールドだけや!!」

そういつて少年が頭のニット帽を外すと、そこから現れたのは

「犬耳 k t k r ! ! !」

その瞬間私は少年の目の前にテレポートしていた。トラウマ? 愛の前じゃ壁にもなりはしないわよ!

突然目の前に瞬間移動した私に少年は酷く驚いていたけど(めっちゃ可愛かったわ!!)、そんなこと気にはせず、私は抱きついたわ。もうね! お日様の匂いを浴びましたって感じの匂いでね!!

たまんなかったわ!!!」

「な!?! 瞬動か!?! ってか離れ!?! 俺は女殴る趣味なんてないんや!?!」

「いやよ!?! 離れたりなんかしないわ!?! それと私を呼ぶときはお姉ちゃんって呼んで!?!」

「なんでや! だいたい俺とお前は同じ年くらいやろうが!?!」

「あーもう!?! そんな反抗期なところも可愛いじゃない!?! ほつぺたプニプニしちゃうんだから!?!」

第二戦 Winner Awakin Punipuni KO

第三巻 あわきん、アルビノシヨタと出会う

あの後なんやかんやで犬っ子ことコタきゅんを屈服させ（屈服って言うっても変な意味じゃないのよ? ちょっと組み伏せて唇奪って仮契約をしたくらいで）、ちょっと涙目になってたネギきゅんと一緒に関西ホニヤララ協会にやってきた。にしても涙目のネギきゅんも美味しそ...可愛かったわ。きつとコタきゅんのクモが怖かったのね。大丈夫よ、お姉ちゃんがずっとついてあげてあげるから。

そこで私たちを迎えたのは父の戦友を名乗る男。ぶっちゃけ興味なんかなかったから名前も憶えてないけど。

今日は泊まって行ってくれという申し出を受けてのんびり明日以降ネギきゅん&コタきゅんとどこを観光しようかなんて考えていたわけだけれど、そんな折に入ってきたのが協会への襲撃の知らせ。なんでも近衛の娘を攫って鬼神とやらを復活させようとしているらしい。本ツツツツツ当にどうでもよかったんだけど、愛しのネギきゅんが頼んでくるから私も追跡に加わったわ。

途中で待ち伏せしていた鬼の群れはテレポートでやり過ごして（その時同行していたツインテールがはぐれちゃったけど、死にはしないでしょ。ツインテールって嫌いなよね）、祭壇っぽいところまでたどり着いたころには、なんだか光ってる巨人みたいなのが頭を出してたわ。

もっともそんなことに目を奪われている余裕なんかなかったわけだけれど。

「もう追いついてきたのかい。お姫様の護衛戦士。……一人足りないようだけど」

だって、だってッ!!

「それと君たちは……そうか。スプリングフィールドの子供たち「お姉ちゃん」……は？」

「お姉ちゃん、でしょ？」

だって超レアなアルビノシヨタ……少年がそこにいたんですもの！
なにあの子、クーデレって奴かしら？ なんにしてもたまらないわ！ 身長はネギきゅんと同じくらい。男の子とは思えないほど線が細いわね！ そしてあの大人びた表情。きっと頑張って背伸びしてるのね！ でも心の中では甘えられるお姉ちゃんを求めて、でも

素直になれずクールを装ってしまってるのよね!! お姉ちゃんは分かってるわ!! ぶっきらぼうに「やめてくれないか」って言われても、それが本心じゃないってのを理解してるお姉ちゃんはまだでし続けてあげるの!! そうするとあの子は頬をちよつとだけ染めて「しょうがないから……続けてもいいぞ」なんてボソツと呟くのよ!! たまんないわあ!!!

「いったい何を「それ座標移動」ムーブポイント」

私の声とともにアルビノ少年が私の胸の中に移動してくる。目を白黒させちゃって、ホント可愛いんだから。もうクンカクンカしちゃうわ!!

「今いったい? ——ッ!? 君は危険だ!!」

腕の中でもかく少年。でもね、その程度の腕力じゃ愛の力は崩せないわ。

「くそっ! 抜け出せない! ならばこのまま、ヴィシユタル——」

あら、始動キー? もしかして惚れ薬的な魔法なのかしら? そんなことせずともお姉ちゃんはクーデレきゅんにぞっこんなのに。と、柔らかい白髪にすりすりしていたら、何やら月明かりを隠す影が。

「冥府の石柱!!」

あらおつきい。すごいねえ。でも、

「はい座標移動」ムーブポイント

空から降ってくる六本の石柱を纏めて転移。転移先はさっきからうるさく吠えている光る巨人。

ストライクって言いたくなるほど見事に石柱たちは巨人の四肢に突き刺さっていた。

「な!？」

なんてクーデレきゅんは啞然としていたわ。もうどこまで可愛ければ気が済むのかしら。

「さ、うるさいのも片付いたことだし、そろそろペロペロしてもいいわよね？」

「は？ い、いや、いったい何を言ってるんだ、スプリング「お姉ちゃん、でしょ？」」

「だからなんだそれは!？ そもそも「お姉ちゃん、でしょ？」」

「いや、だから「お姉ちゃん、でしょ？」」

「お、お姉ちゃん」

「キャー、もうなんて可愛いのかしら!!」

第四卷 あわきん、世界を手に入れる

「ふっふっふ。思えばイレギュラーばかりだたネ。ご先祖様には双子がいるし、クラス3-Aに赴任してこないし、京都ではエヴァンジェリンの助力ナシにすべては解決するし。私の知る歴史とはずれ過ぎているけれど、しかしどうやら私にとってはよい方に転がっていたようだたヨ。なんたってこの歴史上のご先祖様には今の私に對抗するだけの力なんてないのだから！ さあハカセ！ 魔法陣の準備は万全かな？……って、何故アナタがここにいる力！？」

「あ、やっと思いついた？」

私は啞然とする張（だっけ？）に手を振りながら答える。

ちなみに現在は麻帆良学園祭最終日。世界樹の発光をネギきゅんとコタきゅん（召喚済み）とフェイトきゅん（仮契約&召喚済み）との四人で眺めようとしてただけど、そんな甘酸っぱい雰囲気をぶち壊してくれたのが鬼神兵による麻帆良の占拠。魔法関係では博学なフェイトきゅん曰く、世界を変えるほどの魔力量を誇る世界樹の力を借りて、誰かが何やら儀式をしたがってるとか。あとは簡単これ見よがしに浮かんでいる飛行船があったからレポートで飛んだまでのこと。ここにいた女の子なら座標移動で魔法先生たちのど真ん中に移動させたわ。

「い、いや、アナタが何故ここにいいのかは今はどうでもいいネ。それよりも！ 魔法陣に何をしてる力！？」

「もうちょっと待ってね。ここを削って、確かこんな感じに繋げればって」

勉強しておいてよかったわ。魔法っていうのも。

正直がんばるネギきゅんを隣で眺めたかった一心でメルディアナに通っていたわけだけど、こんな形で役に立ってくれるとはね。他に使えるような魔法なんて、年齢詐称薬（幼化オンリー）くらいだもの。

「さて、完成。いくわよー」

「ま、待つネ！」

なんて張（？）が叫ぶけど無視無視。変な感じに瞬間移動までしてきたけど、十一次元で世界を捉えるこの私の敵ではないわ。少年たちへの愛でパワーアップしてるしね！

だからその場で見てなさい。私が世界を変革するのを！

「テクマクあわきん☆ テクマクあわきん☆ この光で、みんなちっちゃくな〜れ☆」

瞬間、世界樹の輝きが一層と強まり、そして、

「あ、ああ。私の計画ガ」

なんて崩れ落ちたのは張（？）。視線を向ければどこぞのウルトラマンTシャツが涎を垂らしそうなロリ姿。

「うんうん。これで世界は救われたわね」

ぬらりひょんからは張（？）の儀式を止めろとは言われたけど、他の儀式をするなどとは言われなかったしね。

「なんでかしら。この世界なら私を殴ってくれた第一位とも仲良くなれそうな気がするわ」

むしろアイツが今この世界に居なかったことが悔やまれるわね。
この魔法を浴びてくれればアルビノシヨタ二号が誕生したというのに。

「まあいいわ。さて、下に降りて私の旦那様候補（四号以降）を探そつと。ああ、想像しただけでたまらないわ!!」

第四戦 Winner Awa·kin

——とある魔法と座標移動——
ムーブポイント

改め

——とある淡希の完全世界——
コスモエンテレケイア

(後書き)

一方座標もいいけどやっぱ番外通行こそ至高だよね　どもども2P
カラーにござる

久しぶりの短編ですな。長編に煮詰まってたから思いのままに書いてみたけど、やはりスランプなのか、駄文にて候

あわきん可愛いよあわきん

感想待っちよるぜよ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2000t/>

とある科学とネギまの世界

2011年5月12日12時32分発行